

秋のくまもと お城まつり『熊本城武道の祭典・古武道演武会』

(裏面に各流派の歴史を紹介しています)

平成21年10月10日

◇ 開会式 午前11時00分～

●主催者挨拶

●熊本県古武道会会長挨拶

田代 高造

(1)野田派二天一流 剣術

・一刀太刀の形

(のだは にてんいちりゅう)

小・中・高校生 門下生 25名

・二天一流 五方之形

(打太刀) 大群 和史 (仕太刀) 荒木 章博

(2)本體楊心流 柔術、棒術

・柔術(逆の型) 10本

(ほんたいようしんりゅう)

取り 原賀 洋 受け 山川 誠

取り 平川 照寿 受け 日影 涉

・棒術(混合の型) 2本

太刀 高岡 善雄 長棒 平川 照寿

・長棒組太刀 5本

半棒 原賀 洋 太刀 山川 誠

・半棒組太刀 5本

太刀 高岡 善雄 小太刀 平川 照寿

・小太刀組太刀 5本

取り 原賀 洋 受け 平川 照寿

・柔術(奥の型) 10本

(3)根岸流手裏剣術

1仕方

(ねがしりゅうしゅり)

(解説 舛田 紘一)

・卍字

早瀬 渡

・刀字

望月 一樹

・直指

竹村 睦美

2仕掛方

外川 誠一

池永 泰雄 西島 淳一

小澄 良樹

3居合手裏剣型

坂田 弘

村上 龍一 舛田 紘一

(4)日置流竹林派 弓術

矢襖

(2本)

前列

後列

陣太鼓

侍大将

(へぎりゅう)

西田 晶博

糸山 利幸

坂田 健寿

(解説 津野幸一郎)

弓取 弘幸 松永 幸倫

俣島 里美 一川 沙也香

田中 正晃

松嶋 宏平

(5)寺見流 剣術

(じげんりゅう)

(解説:松本 泰吾)

表ノ形 (6本)

(打太刀) 光永 俊治

(仕太刀) 光永 健二

切返ノ形 (5本)

(打太刀) 松本 泰道

(仕太刀) 光永 俊治

(6)日置流吉田派 弓術

矢襖

三人体配

射手

矢取り

(へぎりゅう)

間部 光矢

野中 裕美

西谷 光生

(7)関口流抜刀術

(せきぐちりゅういあいじゅつ)

(解説:米原 龜生)

関口流抜刀術

・太刀の形

(打太刀) 本多 慶臣

(仕太刀) 富田 祐生

(8)日置流道雪派 弓術

射去祭之儀

(へぎりゅうどうせつは)

射手 石阪 末雄 八代 二夫

的奉行 平野 忠也

(解説:水戸 秋光)

高橋 平

(9)無外流居合兵道

無外流居合之形 5本 (北斗・太白・稻妻・霞・流星)

(むがいりゅういあいひょうどう)

(打太刀) 甲木 博文 (仕太刀) 山村 征次

無外流居合 7本 (真・水月・陽中陰・前腰・胸尽し・両車・野送り)

甲木 博文 坂口 紀久男 能勢 捨三 峰松 明暉人

山村 征次 山下 圭三 中間 圭康

(解説:吉田 祐一)

(10)神道夢想流 杖術

・制定形・表・中段・影より5本行う。

(しんどうむそうりゅうじょうじゅつ)

(解説:内田 利憲、上村 恭徳、鳴海 孝義)

5本 (打太刀) 池永 泰雄 (仕太刀) 上村 恭徳

5本 (打太刀) 桑野 兼伊知 (仕太刀) 鳴海 孝義

(11)伯耆流熊谷派 居合術

・身之規矩、表 (5本)

(ほうきりゅうくまがいは)

堺 賢良 他力 繁明 宮本 例似子 井上 大学

高嶋 圭史 塩永 快助 柳瀬 純一 塩永 孝一

(解説:清田 雅雄)

・中段、詰合 (5本)

清田 雅雄

(12)大東流合気武道

・一ヶ条

(だいてりゅうあいきぶどう)

大林 克己 大林美奈子 木次 健司 姫野 誠也

有働 秀俊 原田 克也 上村 高広 前田 俊博

(解説:前田 俊博)

・三ヶ条

(4)日置流竹林派 弓術

矢襖

(2本)

前列

後列

陣太鼓

侍大将

(へぎりゅう)

西田 晶博

糸山 利幸

坂田 健寿

(解説 津野幸一郎)

弓取 弘幸 松永 幸倫

俣島 里美 一川 沙也香

田中 正晃

松嶋 宏平

(13)四天流星野派 柔術

・四天流組討『赤身』6本

(してんりゅうほしのは)

(取り) 松永 利雄 豊永 安則 楠瀬 征夫

(受け) 西川 真澄 加藤 至

・四天流組討『風身』9本

(取り) 正木 讓 西嶋 淳一

(受け) 緒方 善智 武田 光久

・肥後流躰術之形 10本

(取り) 田代 高造 (受け) 泉 一則

(14)肥後古流長刀術

・常の表 (8本)

(ひごこりゅうなぎなた)

(打太刀) 紫垣 美恵 (仕太刀) 西嶋 和子

・真の手 (8本)

(打太刀) 平田 真由美 (仕太刀) 今村 幸子

・新形 (6本)

(打太刀) 紫垣 美恵 (仕太刀) 西嶋 和子

・中段 (4本)

(打太刀) 平田 真由美 (仕太刀) 湯口 美佐江

◇ 閉会

演武者全員整列

●御礼の辞

熊本県古武道会副会長 井上 弘道

午後3時00分終了予定

熊本県古武道会 演武流派の歴史

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

宮本武蔵の五輪書

野田流二天一流剣術 宮本武蔵は寛永 17 年（1640）に肥後の細川忠利(ただとし)公に招かれ、細川家の客分となり、その翌年、忠利公に「兵法三十五箇条」を献上した。その2年後寛永 20 年 10 月 10 日に靈巖洞に籠もり「五輪書」を執筆。正保 2 年（1645）5 月 12 日に寺尾勝行に「五輪書」を、寺尾信行には「兵法三十五箇条」を授与して没した。こうして、以来二天一流は寺尾一族により継承された。二天一流は世に云う二刀流ではなく、構えあって構えなしの片手剣法が武蔵の真意である。

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

高木流柔術

本體楊心流柔術 開祖は17世紀半ばに活躍した奥州白河藩の高木折右衛門重俊。無刀流小太刀や槍術を学んで奥義に達し、白河藩の指南役を勤めた。父の戒めの言葉「楊木は強く、高木は折れるぞよ」から名を取り、楊心流と名づけた。2代は高木流柔術を編み出した日向延岡の高木馬之輔重貞。折右衛門に師事し、のち養子となって剣、槍、居合、大術等の奥義を極めた。4代目が薙刀(なぎなた)の名手で、九鬼神流棒術を創始した出雲の住人大國鬼平重信。この小太刀、柔術、棒術を三本柱として400年続いている総合武術が本體楊心流武術である。

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術

根岸流手裏剣術 流祖は安中(あんなか)藩<群馬県>の根岸松齡。藩校造士館の代々の剣道師範の家に天保 4 年（1833）に生まれた。剣道、槍術、柔道、鎖鎌(くさりがま)など多技に優れ、職国武者修業するなかで、水戸藩剣道指南役の海保汎平（千葉周作の高弟）から願立流手裏剣を伝授された。技の鍛錬に励む一方で、打力、刺力随一を誇る手裏剣の改良に成功し、根岸流を名乗った。熊本では星野道場での副師範・福田彦平が技を学び、上村家が代々、継承してきた。

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術 **日置流肥後竹林派** 戦国時代に始まり、440年の歴史を持つ弓術の流派。7代目に師事して奥義の相伝を受けた江戸詰の肥後藩士・木原鼎雲正明を、肥後藩主細川重賢（しげたか）公が宝暦 6 年（1756）、時習館講武所の弓術師範に招いたのが肥後での始まり。以後、幕末まで道雪派、吉田派とともに時習館で藩士に指導し隆盛だったが、明治維新以後は衰微。明治後半に元細川藩士・小笠原宥師範によって復興され、旧八代城主・松井敏之師範に相伝された。以後、松井家に受け継がれ、現在の師範（松井葵之）は竹林派初代石堂竹林如成から24代にあたる。

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術 **日置流肥後竹林派** 戦国時代に始まり、440年の歴史を持つ弓術の流派。7代目に師事して奥義の相伝を受けた江戸詰の肥後藩士・木原鼎雲正明を、肥後藩主細川重賢（しげたか）公が宝暦 6 年（1756）、時習館講武所の弓術師範に招いたのが肥後での始まり。以後、幕末まで道雪派、吉田派とともに時習館で藩士に指導し隆盛だったが、明治維新以後は衰微。明治後半に元細川藩士・小笠原宥師範によって復興され、旧八代城主・松井敏之師範に相伝された。以後、松井家に受け継がれ、現在の師範（松井葵之）は竹林派初代石堂竹林如成から24代にあたる。

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

日置流弓術

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永流居合道

寛永 17 年細川忠利公に招かれて肥後熊本に来て、泰勝寺の大淵和尚に「二天道楽」の法号をもらって以来、「二天一流」と言い替えた。兵法二天一流は、宮本武蔵-寺尾信行-寺尾勝行（信行の六子）…山東清香と伝えられ、「山東派」と称された。「五輪書」には二刀のこののみ書かれ、また、武蔵の肖像画でも二刀を携えているが、巖流島の決闘まで、60 余りの試合に敗れることのなかった体験を元にして編みだされたのが一刀の形 12 本で、本流派の本命は一刀の形である。

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術

日置流道雪派弓術